1/4
朝日

派遣社員は76歳
――働き続ける高齢者

エイジング・ニッポン

5

車が返却されると、レンタカー営業所の動きが慌ただしくなった。書類を確認し、傷を点検し、車をバックで動かすと、狭いスペースにぴたりと決めた。

運転席から降りてきたのは白髪の男性だった。派遣社員の池田正英さん。76歳。車の内部を手際良く拭き、外は水で洗う。感覚がにぶるからと、手袋はつけない。大きな声で客を見送る。「お気をつけて行ってらっしゃいませ！」

10年ほど前に同い年の妻に先立たれ、一人暮らしをしている。池田さんにとって、仕事は心の支えだ。

埼玉県蕨市の自宅から千葉県市川市の営業所まで、3本の電車を乗り継いで片道1時間半。早朝からの就業時刻に間に合うように午前3時半に起きる。それを週4日。楽ではない。それでも「働けることが幸せなんです」と言い切る。

地元の高校を卒業後、車の修理店で働いたり、タクシーの運転手をしたりした。その後、企業向けのハイヤー運転手になり、定年を延ばして70歳まで続けた。

退職が近づいた時、「仕事のない生活」に想像がつかなかった。「じっとしているのは体にも良くない」と考えていた時、取引先から紹介されたのが、高齢者の派遣を専門に扱う「高齢社」（東京都）だった。

勤務地や職種など高齢者の希望に合わせて、企業に派遣する。時給は1千円ほどのことが多く、80代までの1千人以上が登録している。人手不足を反映し、最近は、現役世代が避けたがる早朝や土日の仕事が多い。それでも、同社の緒形憲社長(69)によれば「働かなければならない」という人より「働きたい」という人が多いという。

池田さんには、都内に住む長女(47)がいるが、頼ろうとは思わない。長女も「無理せず働けるうちは働いてほしい。友人のいる所に住むほうが、本人も楽しく生活できるのでは」と見守る。

休日の夜、家の向かいのカラオケスナックで常連の友人たちと歌うのが、池田さんの楽しみだ。十八番は、北島三郎と鳥羽一郎のデュエット「演歌兄弟」。

〈人と言う字は 寄り合って もたれつ あゝ生きている〉

働くお年寄りが増えている。2017年の高齢者の就業者数は807万人と過去最多を更新し、その約4割は70歳以上が占める。

政府も「人生100年時代」を旗印に、高齢者の就労を後押しする。膨れあがる社会保障費の抑制や労働力不足を補うため、お年寄りであっても、元気なうちはできるだけ社会を「支える側」に回ってもらおうというねらいだ。

●●●

しかし、前向きに働きたい人や思うように働ける人ばかりではない。生活にゆとりがなく、「明日」への不安と背中合わせで生きている人たちも多い。

東京都内の寺院。元日の初詣客でにぎわう人混みのなかに、露店でリンゴあめを売る女性(74)がいた。彼女には、80歳まで働き続けなければならない理由がある。（新屋絵理、水戸部六美）

2面に続く

1/4 朝日

長い老後 年金だけでは

エイジングネットワーク

1面から続く

「長い老後」を生きるためには働かざるを得ない。だが働きたくても働けない。急速に進む高齢社会の波が足元に打ち寄せた時、自分はそんな境遇に転じないと言い切れるだろうか。

「1個400円です。お好きなのどうぞ」

東京都内の寺院で初詣客にリンゴあめを売る女性（74）は、寒空の下、立ちっぱなしだった。セーターを5枚重ね、ズボンの下にはタイツと毛糸のもも引き。その格好で午前9時から午後8時まで続けた。

年末年始はかき入れ時で手取りは増えるが、ふだんは1万円程度にしかならない。「準備の手間も含めれば、時給に換算しちゃうとばかばかしいけど、日銭がほしいの」

40年ほど前に、病気で夫をなくした。子どもを育てながら病院の事務などで働き、65歳で定年退職。夫が残してくれた自宅の建て替えに退職金をつぎ込んだものの、お残額は300万円を割え、80歳までローン返済が続く。しかも家庭の事情でその自宅にも住めなくなり、木造アパートに暮らしている。

アパートの家賃とローンを合わせた額は9万円近く。月約16万円の年金だけでは不安で、退職後に雇天商を始めた。生活費を浮かすために、食事は露店であったに焼きや今川焼きをもらって冷凍し、近くの老人福祉センターの無料浴場に行く。「80歳までは健康でがんばりたいの」

元日から初詣客相手にリンゴあめやイチゴあめを売る女性（左）＝東京都内、飯塚晋一撮影

負担した分 戻ってくるなら

都内の女性（71）は2年前、70歳になるのを理由に退職するよう告げられた。40年以上皆勤はやしで三味線を弾いてきた。

数年前に定年制ができたことは知っていたが、80歳を過ぎても働き続けた師匠業大学の神野直彦学長（財政学）は「みんなで負担を分かち合い、社会全体で老後を支える安全網を強化すべきだ」と訴える。

急速な人手不足が進む日本では、社会にあまれた「隙間」を高齢者が埋めている。お年寄りが活躍できる社会を目指すべきだが、誰もが健康で働き続けられるわけではない。日本社会事

政府は昨年5月、2040年度には社会保障給付費が約190兆円まで膨らむとの推計を公表した。18年度の約1・6倍になる。これは公的な「支出」に当たる。それを賄うのに、税金や社会保険料からの「収入」だけでは間に合わない。すでに国の借金は大きく膨らみ、将来世代にツケを回している。

国民所得に対し、税金と社会保障の負担割合を示す「国民負担率」でみると、日本は42・5％（18年度見通し）。世界でも経験したことのない超高齢社会を迎えるにもかかわらず、英国やドイツ、スウェーデンといった欧州諸国に比べると負担は低い。

向き合うべきは、将来増える給付を誰の負担で支えるのかだ。

核家族化、終身雇用の崩壊、単身高齢者の急増――。困った時に家族や企業、地域が助けてくれるといったこれまでの安全網は崩れつつある。

神野氏は「大事なのは高齢者と子どもの世代を社会がちゃんと扶養すること。それぞれの負担が増えたとしても、その分のサービスが目に見える形で戻ってくる社会を目指すべきだ」と話す。

（大塚智彦、水戸部六美）

全国世論調査

何歳まで働き続けますか？

理想は65歳 現実は70歳

あなたは何歳まで働き続けますか？ 朝日新聞社が実施した全国世論調査（郵送）では、理想と現実のギャップが浮かび上がった。

何歳ぐらいまで働くのがいいか、理想を聞くと、「65歳」が36％と最も多かった。これに「60歳」「60歳より前」を合わせると65％。18～29歳の8割、30代の7割が65歳以下の「現役引退」が理想と答えた。

一方、生活のために現実に働かなければならないのは「70歳まで」が最多で33％。「75歳」「80歳以上」を合わせると52％で、半数が少なくとも70歳までは働かざるを得ない、と予測。男性に限ると、65歳までに引退できると思っている人は35％にとどまった。

老後の一番の不安を尋ねると、「お金」が最も多く48％。「病気やケガ」が37％、「孤独」が12％だった。30代の7割が「お金」と答えた。

一方、老後の生活費として公的年金で受け取る金額を「大いに」と「ある程度」を合わせて43％。「あまり」「まったく」を合わせて55％が「あてにならない」と答えた。不信感は若年層ほど強く、40代以下で「あてになる」と答えたのは2割にとどまった。

政府は、10月に10％に増税する消費税を全世代型社会保障の財源にするとしている。消費増税には50％が「反対」し、この消費増税が将来の社会保障制度に対する不安解消に「つながらない」と思う人は75％に上った。

生活費全への不安からか、生きがいのある老後を「送れる」人は37％にとどまり、「送れない」は52％。生活水準によって回答に差があり、「中の上」と答えた人の57％が「送れる」と答えたのに対し、「中の下」の人の63％が「送れない」と悲観的だった。

調査は昨年11～12月に実施。全国の有権者から無作為に選んだ3千人に質問票を郵送し、2038人から有効回答を得た。回収率は68％。

（横田紀昭）

◇

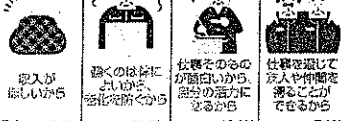
調査結果は13日付朝刊で詳報する予定です。

老後の生活費として公的年金は…

	大いにあてになる	ある程度あてになる	あまりあてにならない	まったくあてにならない
18～49歳	3%	17	51	28
50代	7	33	41	17
60代	13	43	31	10
70歳以上	26	41	23	6

その他・答えないは省略

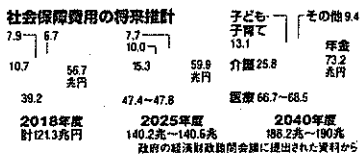
高齢者が今後も働きたいと思う理由



	収入がほしいから	動くのは体によいから、老化防止のため	仕事そのものが面白いから、自分の活力になるから	仕事を通じて友人や仲間を増やすことができるから
日本	49.0%	24.8%	16.9%	7.1%
米国	52.7%	14.9%	28.1%	2.8%
ドイツ	31.9%	14.8%	48.9%	0.9%

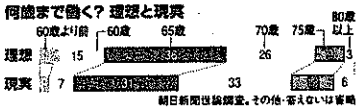
内閣府の2015年度調査から作成。その他・答えないは省略

社会保障費用の将来推計



政府の経済財政諮問会議に提出された資料から

何歳まで働く？ 理想と現実



朝日新聞世論調査。その他・答えないは省略